

音楽部会 研究の構想（案）

令和7年度～

I 研究主題

幅広い音楽活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。

II 主題設定の趣旨

令和4年度からの3年間は、「幅広い音楽活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。」を研究主題とし、音楽科で目指す資質・能力「生活や社会の中の音や音楽と文化と豊かに関わる資質・能力」の育成を目指し、「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育む授業づくり」「『指導と評価の一体化』のための授業改善」の視点に基づき、研究を進めてきた。

音楽科で目指す資質・能力を育成するためには、「音楽的な見方・考え方」を働かせることが重要である。「音楽的な見方・考え方」とは、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化等と関連付けること」であると示されている。生徒が音楽を形づくっている要素の知覚・感受を支えとして、自ら音や音楽を捉えていく学習を積み重ねることで、実感を伴った理解、必要性の実感を伴う技能の習得、質の高い思考力、判断力、表現力の育成、人生や社会において学びを生かそうとする意識をもつことにつながる。

音楽科において育成を目指す資質・能力を、生徒が確実に身に付けることのできる題材構成や学習活動の在り方について「主体的・対話的で深い学び」の視点からの一層の授業改善が求められる。これまでの成果を生かし、より深まりのある研究を推進するためにも、本研究主題を継続し、主題解明に向けて研究を進めていきたい。

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するため、これまでの研究成果や課題を整理し、生徒の実態を踏まえながら、継続的な研究を通して研究主題を解明する。

2 研究内容

(1) 指導計画作成の工夫

- ・「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る指導計画の作成
- ・題材等内容や時間のまとまりを考慮した指導計画の作成
- ・〔共通事項〕の適切な位置付けと、〔共通事項〕を要とした各領域や分野の関連
- ・指導のねらいを実現するための適切な教材選択

(2) 学習指導の工夫

- ・「音楽的な見方・考え方」を働かせ、思考、判断し、表現する一連の学習過程の充実
- ・必要性を実感できる知識や技能の習得を目指した指導の工夫
- ・音楽科の特質に応じた言語活動の充実
- ・協働的な音楽活動の充実と学習形態の工夫
- ・音や音楽と生活や社会との関わりを実感できる指導の工夫
- ・ICTを効果的に活用した指導の工夫

(3) 指導と評価の一体化

- ・ねらいを明確にした評価の工夫
- ・「形成的評価」（指導に生かす評価）と「総括的評価」（記録に残す評価）の使い分け
- ・自己評価や相互評価等、生徒が自己の学びを実感できる評価の工夫
- ・ICT等を活用した生徒の学習記録の累積

音楽部会 令和8年度研究計画（案）

I 研究主題

幅広い音楽活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。

—「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習指導—

II 主題について

昨年度は、「指導と評価の一体化」に焦点を当て、その実現を図るための授業改善について研究を進めてきた。

授業においては、声部の役割や伴奏の効果を実感させるために歌って試したり、ICTを活用して互いの考えや表現を共有したりすることで、音楽表現の工夫や楽曲のよさ等について、感じ取ったことと音楽的な特徴とを結び付けて考え、言葉等で表す姿が見られるようになってきた。しかし、思いから意図へ、知覚から感受へと思考や理解をつなぎ、知識や技能の習得等に結び付けるまでには至っていない。

教師は、「何を学ぶか」という目指す資質・能力を生徒に身に付けるために必要な学習内容を明確にし、その内容を「どのように学ぶか」といった生徒の具体的な学びの姿を想定しながら学習指導を行っていく必要がある。また、生徒自らが学びを調整しながら学習内容を確実に身に付けることができる指導の工夫、他者と協働しながらよりよい学びを生み出すための場の充実等が求められる。さらに、習得した知識・技能を結び付け、繰り返し使うことで生きて働く知識・技能となるようにしていくことも大切である。

そこで、研究の副題を「『主体的・対話的で深い学び』を実現する学習指導」とし、幅広い音楽活動を通して、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成したい。

III 研究内容とその視点

1 指導計画作成の工夫

- (1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る指導計画を作成する。
- (2) 題材等内容や時間のまとまりを考慮した指導計画を作成する。
 - ・〔共通事項〕を要として、各領域や分野相互の関連を図る。
- (3) 〔共通事項〕は、「A表現」及び「B鑑賞」の各事項の指導と併せて、十分な指導が行われるよう適切に位置付ける。
 - ・生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を適切に選択する。
- (4) 指導のねらいを実現するために適切な教材を選択する。

2 学習指導の工夫

- (1) 「音楽的な見方・考え方」を働かせ、思考、判断し、表現する一連の学習過程の充実を図る。
 - ・ねらいを明確にした学習課題の設定や、学習の成果が実感できるようなまとめや振り返りの場を設定する。
 - ・「曲を聴いて感じたこと・気付いたこと・気になったこと」「曲のどこに注目して聴きたいか」等の問いから生徒の関心や着眼点を把握し、本時のねらいに反映させる。
 - ・生徒同士の対話やワークシート等の内容を取り上げることで、生徒が音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えることができるようにする。
 - ・生徒一人一人の思考や表現を可視化するために、板書を工夫したりICTを効果的に活用したりする。
- (2) 必要性を実感できる知識や技能の習得を目指した指導の工夫を図る。
 - ・生徒が創意工夫の過程でもった思いや意図を音楽で表現する際に、自ら活用できるよう、思考力、判断力、表現力等を相互に関わらせた題材の構成を工夫する。
 - ・生徒自身が自らの成果や課題を実感できるよう、録音や録画、チェックシート等による自己評価や互いに聴き合うなどの相互評価ができる場を設定する。
 - ・音楽のよさや美しさを味わって聴く過程で、必要な知識が習得できるよう課題提示の方法や授業展開を工夫する。

- (3) 音楽科の特質に応じた言語活動を位置付け、音や音楽を介したコミュニケーションの充実を図る。
 - ・音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりすることができるよう、他者と協働しながら考えを深める場を設定する。
 - ・自己のイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図、音楽に対する評価等を伝え合い共感するなど、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、生徒一人一人の音楽に対する価値意識を広げる。
 - ・言葉のやり取りに終始することなく、実際に様々な方法で歌ったり、演奏を聴き返したりするなどして、言葉で表したことと音や音楽との関わりが捉えられるようにする。
- (4) 協働的な音楽活動の充実と学習形態の工夫を図る。
 - ・ペアやグループによる協働的な学習を計画的に取り入れ、他者との対話を通して自分の考えを広げたり深めたりできるようにする。
 - ・生徒の発言や表情等から思考の方向性を把握し、教師の即時的な言葉かけによって対話の内容に価値付けを行い、学びの深まりを促す。
 - ・ワークシートやICTによる対話の記録を活用し、共感から再構築へ至る思考の流れを生徒が把握できるようにすることで、「音楽的な見方・考え方」を働かせる深い学びを促す。
- (5) 音や音楽と生活や社会との関わりを実感できる指導を工夫する。
 - ・生活や社会の中には様々な音や音楽、音楽文化があり、日々の生活や社会の営みに直接的、間接的に影響を与えていることに気付くことができるようにする。
 - ・様々な音楽がもつ固有の価値や多様性を理解し、音や音楽によって人はどのように感情を伝え合い、共有し合ってきたかなどについて実感できるようにする。
 - ・生活や社会の中の音や音楽の働きの視点から、学んだ意味や価値を理解し、音楽科の学習がその後の学習や生活にどのように関わるかに意識を向けられるようにする。
- (6) ねらいを明確にした、ICTの効果的な活用を工夫する。
 - ・録音や録画、クラウド共有等を取り入れ、生徒が自己評価と相互評価を通して学びを深めることができるようにする。
 - ・作曲アプリケーションや音素材を活用し、作曲体験やオリジナル作品制作を行うことで、創造的な表現力を育成する。
 - ・各校の実態や生徒の実情を踏まえながら、ICTを活用した新たな教材や学習活動等を工夫し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る。

3 指導と評価の一体化

- (1) ねらいを明確にして題材の指導計画に評価場面を位置付け、適切なタイミングや方法で評価を行う。
- (2) 「形成的評価」（指導に生かす評価）と「総括的評価」（記録に残す評価）を区別し、効果的に使い分ける。
- (3) 自己評価や相互評価等、生徒が自己の学びを実感できる評価を工夫する。
- (4) ICT等を活用して生徒の学習記録を累積する。

IV 研究方法

- 1 学習指導要領の趣旨等の理解を深め、研究の継続と累積に努める。
- 2 各郡市内や郡市間で研究体制を整え、日々の授業実践を基に共同研究を推進する。
- 3 教師自身の感性を磨き、指導力及び授業の分析・考察力の向上を目指して積極的に研修を行う。
 - (1) 様々な研修会等に積極的に参加し、目指す資質・能力を育成する方法や技能をより一層磨き、指導力を高める。
 - (2) 授業や評価に関する技能向上のため、充実した研修会や協議会を企画・運営する。
 - (3) 授業に関する資料を持ち寄ったり、新しい教材の紹介や地域の人材に関する情報交換を行ったりするなど、教師間の連携を密にする。

